

令和3年度
入学試験問題

第1回

国語

- 1 問題用紙は監督者かんとくしゃの指示があるまでは開いてはいけません。
- 2 開始のチャイムが鳴ったら、最初に問題用紙と解答用紙に受験番号と氏名を記入して下さい。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入して下さい。
- 4 記述で答える問題は、特に指定のない場合、句読点くとうてんや符号ふごうは一字として数えるものとします。
- 5 問題は1ページから16ページまであります。

受験番号		氏名	
------	--	----	--

森村学園中等部

一次の【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を読んで、あとの問いに答えなさい。

【文章Ⅰ】

① 土屋文明さんという歌人がいた。「アララギ」という明治以来の結社誌を率いた最後の大物歌人と言ってもいいかもしれない。歌を始めたばかりの人たちが様に口にするのは、「私は思っていることが、どうもうまく言葉にできません」ということである。文明さんはこれを聞いて、「それはうまく歌にできないのではなくて、自分が何も考えていないから歌にならないんだ」と喝破した。① なんと爽快な、いかにも文明さんらしいひとと言である。

私たちはほんらい自分のなかで考えたり、感じたり、思ったりしたこと何分の一も表現できていないと感じやすいものだ。ほんとうはもつと深い思いがあるはずなのだけれど、技術が未熟なせいそれが歌として、言葉としてまとまらないと考えがちである。しかし、それは錯覚であることが多い。我々は漠然と深遠なことを考えているように勘違いしているが、実はほとんど何も考えていないことのほうが多いのである。

それは、自分の思考を言葉に移し替え、可視化しようとしたときに端的にあらわれる。どの言葉が実際に自分の考えていることにもつとも近いかなどと考えながら、言葉を選択していく。同じような意味を表わす言葉であっても、そのニュアンスまで考え始めると、自分のもっている言葉のレパートリーの範囲内で納まらないことも多く、他に適当な言葉がないかなどと辞書を繰ったりしなければならなくなる。

そんな言葉探しの過程で、自分が考えていたと思っていたことが、どんどん形を変え、希薄になり、ぼやけていってしまうということをしなれば経験することにもなるだろう。自分が漠然と「考えていた」と思っていたものが、いかにいいものでもあつたか、いかに底の浅いものであつたか、それは思いを言葉に置き換えるプロセスのみ、明らかになってくるものだ。土屋文明さんの言うとおりである。

② 現代においては「待つ」という時間に対して、誰もが不寛容になっていられると思われない。③ と言う私自身がそうなのである。

東京の山手線はすごいと思う。ほとんど5分と間隔をあけずに、次の電車がやってくる。朝のラッシュ時など、どの駅にも1台ずつ電車が停まっているのではないかと思うほどである。あの長距離を走る新幹線でも、多い時間帯は10分と間隔が空いていない。私たちは、そんな待ち時間に慣れてきてしまった。

かつては、バス停で10分や15分待つの普通のことであつたが、この頃の京都の市バスなどは、次のバスがどこまで来ているかを表示してくれる。ありがたいことだが、乗客が待つという時間に対して、たえる力が減退しているということの証左とも言えよう。

待つというストレスから解放され、便利になったのだから文句を言う筋合はないのだが、ちょっと待てよと思わなくもない。それは情報を得るスピードに関してである。近年、私たちのまわりで、もつとも大きく変わったのがインターネットの普及であることはまちがいないだろう。インターネット環境が激変し、コンピュータからだけでなく、スマホからも簡単にアクセスでき、私たちは、どこにいてもインター

ネットにつながっている。

インターネットの普及によって、必要な情報が、とにかくすぐ手にはいるようになった。ある一つの言葉を調べるために、分厚い辞書を本棚から持ちだしてきて、そのページをめくるといような面倒な手続きを経ることなく、目的とする単語にネットはすぐさま接続してくれる。ある事件を調べるために、図書館に行つて、関係資料を持ちだすという手間をかけなくとも、ネットの情報でアウトラインをつかむことは、ほとんどの場合可能になっている。

③ いまや情報や知識を得るために必要な時間と手間は、ネット普及前に較べて、比較にならないほどに少なくなっている。まことに手軽になり、高い辞書を買うことも、図書館まで調べに行くことも、ほとんど必要ないまでに手軽になってしまった。

これを駄目だと言う自信は、私にはない。ないが、それでいいのかとも思う。

私が危惧を感じるのは、まず第一に、「知」があまりにも手軽に手に入るといふ状況は、これからの私たちの「知」へのリスペクト（尊敬）の念に、大きな変更を迫ることになるだろうということである。諸橋轍次の『大漢和辞典』を引くとき、新村出の『広辞苑』を引くとき、その行間に、私たちははっきりとは意識しないまでも、これを営々とした努力の末に完成させた人（あるいは人々）の存在を、かすかに感じているはずである。その恩恵を蒙っているという意識は、それが必ずしも感謝にはつながらないまでもどこかで感じているだろう。

あつけなく情報が入ってくるネットでは、そして誰がそれを書いたのかがはっきりしないような説明文からは、そのような「知への尊敬」の念はほとんど湧いてこないというのが実感である。「知」というものがなんとなく入ってくるという前提からは、「知」の開拓のために自らの人生を賭けてみようなどという若者が生れるとは考えにくい。

④ いま一つの問題と私が考えるのは、「知」へのアクセスの直截性である。グーグルにせよ、ヤフーにせよ、検索エンジンはまことに見事に、知りたいと思う情報に私たちを直接導いてくれる。時間の無駄もなく、まことに効率的である。

しかし、この「知」への着地の仕方には、実はなんのおもしろみもないと、私などは思うのである。本が欲しい。本屋へ行つて、なかなか見つからない一冊の本を探す。図書館でも同じであろう。そんなとき、探しているのとは違うものだが、背表紙を見てとても興味を引かれて、思わず買ってしまったなどという経験は、多くの人にあつたはずだ。

この（X）式の、偶然の出会いという形での「知」への遭遇は、ネット環境下では、まず起こり得ないものだろう。一直線に、いま求められている情報へと私たちを導いてくれる。アマゾンで本を注文すれば、欲しい本だけが見える仕組みになっている。意識の外側にあつて、普段は現れてこないのだけれども、背表紙を見ていて不意に自分の別の興味に火がつくといった形での、「知」へのアクセスの仕方、実は読書や調べものの楽しみは、こんな思わず入った横道での出会いにこそあるのかもしれないと、私は思っている。

「待つ」という時間にたえられないで為す知識や情報へのアクセスは、効率的ではあるが、幅ということからはきわめて限定的と言わざるをえない。読書の豊かさといったものは、そんな寄り道にこそあるのだから。

（永田和宏『知の体力』より）

【文章Ⅱ】

* ウェブによって、調べるということ自体がものすごく手軽になりました。また、それによって得られる情報の量も膨大です。そのことを批判する人がいないわけではありません。苦勞して得た情報でなければその価値を判断しにくいし、身につきにくいというのも確かです。ただ、ぼくは手軽になったことが全面的に悪いとは思いません。

これまでは、情報そのものを見つけるのがとてもむずかしいことだったので、レポート課題でもそれを探し当てる能力が問われてきました。しかし、ウェブが普及したいまは違います。情報を見つげるための道具は、すべての人に与えられています。そこで必要とされるのは、同じ道具を使っていかに深い議論をし、ほかの人とは異なる結論を導けるかどうかという能力です。

（中略）

ウェブによって、調べものをするための時間は劇的に短くなりました。そのぶん、何を調べるべきか、調べたものをどう組みあわせるかを考えるために時間を使ってください。いまのところ、ウェブには、自分で何かを考える機能はありません。人間の仕事は、考えることにあるのです。

ウェブの世界はどこまでもつづいています。レポートのためにヴェネツィアのことを調べていたはずが、ガラス工芸の話になっていたり、ヨーロッパの戦乱の歴史から偉人伝のページをよみふけてしまうなど、いちど寄り道をはじめると戻ってこられなくなる経験は誰にもあることだと思えます。

いつも寄り道をしていたのでは時間が足りませんが、たまには寄り道をしながら見聞を広めるのも楽しいものです。どれだけウェブが進歩しても、自分が知ろうと思わなかったことや新しいものの見方を知ることが、寄り道の途中で偶然にぶつかるしかありません。

寄り道で自分の知識や世界を広げながら、必要なときには検索エンジンで一直線に目的の情報にたどり着く、これがウェブとつきあっているための最大のコツかもしれません。

（大向一輝『ウェブがわかる本』より）

（注）【文章Ⅰ】

* 結社誌……………短歌を発表する雑誌。

* 喝破……………大声でしかりつける。

* 漠然と……………ぼんやりとはつきりしないさま。

* 深遠……………奥深いさま。

* 可視化……………見えるようにすること。

- * (辞書を) 繰る…… (辞書を) ページをめくって調べる。
- * 不寛容……心がせまく、受けいれないさま。
- * 証左……事実を明らかにする証拠。
- * アウトライン……だいたいの内容。
- * 危惧……うまくいかないのではとおそれること。
- * 営々とした……休まず自分の仕事にはげむさま。
- * 恩恵を蒙る……ありがたい影響を得る。
- * 直截性……まわりくどくなく、ずばりというさま。

【文章Ⅱ】

* ウェブ……ワールド・ワイド・ウェブ。インターネットの上で情報を公開したり、公開された情報を読んだりするためのしくみ。

※ 問題作成の都合上、原文の表記を一部改めたり、文章の一部を省略したりしたところがあります。

問一 —— 線部①「なんとも爽快な、いかにも文明さんらしいひと言である。」とありますが、筆者はなぜそのように感じたのですか。

その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 文明さんがいかにも上下関係を重んじる人間らしく、入門者を力強くしかつていて、すっきりしたから。
- イ 文明さんがいかにも大物歌人らしく、筆者自身が日頃考えていることを的確に言い得ていて、さすがだと思ったから。
- ウ 文明さんがいかにも歌の実力者らしく、人にこびない堂々とした意見を述べていて、おそれいっただから。
- エ 文明さんがいかにも厳しい指導者らしく、初心者へのはげましの思いを込めていて、ありがたかったから。

問二 ———線部②「それは錯覚さくかくである」とありますが、筆者は、どのようなことを「錯覚」だととらえているのですか。その説明として

最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 言葉の背後にひそむ深い思いを想像するあまり、表現する言葉を選べなくなっていると人々が思い込んでいること。
- イ 複雑な内容や細かい心情が表現できないのは、順を追って考えていないからだ人々が勘違いかんちがしていること。
- ウ 実際には時間をかけて努力しないと進歩はないのに、学び始めはすぐに上達すると人々が期待しがちであること。
- エ 本当は言葉で表現しようとする中身が充実じゅうじつしていないのに、表に出る言葉だけに人々がこだわりがちであること。

問三

—————「漠然ぼくぜんと」とありますが、この言葉は、次の①～④のどこにかかっていますか。最も適当なものを次から選び、番号で答えなさい。

我々は 漠然ぼくぜんと 深遠なことを 考①えているように 勘違②いしているが、実はほとんど何も 考③えていないこと
ほうが 多④いのである。

問四

—————線部③「私自身がそうなのである」とありますが、「そうなのである」の部分を作りやすく言いかえている二十三字の部分をこれよりあとの②の部分から探し、最初と最後の五字をぬき出しなさい。

問五

—————線部④「それでいいのかとも思う」とありますが、筆者は、インターネットの普及ふきゅうにともなって、どのような問題が生じることを心配しているのですか。その問題点を二つ、「……によって……こと」という形になるように、三十字以上四十字以内でそれぞれ答えなさい。

問六

(X) にあてはまる慣用表現として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 千里の道も一歩から
- イ 犬も歩けば棒に当たると
- ウ かわいい子には旅をさせよ
- エ 急がば回れ

問七 【文章Ⅱ】の〰〰部「手軽になったことが全面的に悪いとは思いません」とありますが、筆者がどのように考えるのはなぜですか。

その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 節約できた時間で、調べる内容や方向性などについて議論したり考えたりすることができるから。
- イ ウェブで調べることによって、大量の価値ある情報を、苦勞せずに探し当てることができるから。
- ウ 身近な機器を利用してさまざまな情報が得られるために、だれもが平等に課題に取り組めるから。
- エ 広い分野の情報が得られ、他の人との情報交換じょうほうこうかんも可能なので、独自のレポートが作成できるから。

問八 【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】の内容の説明として適あ当あであないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 【文章Ⅰ】では、情報を得るまでの苦勞や情報の背後にある努力を感じ取ること、自分も一生をかけて研究に取り組みたいと思う人が育つことを期待している。

イ 【文章Ⅱ】では、ウェブでの学習に対する批判を認識しつつも、プラス面をいかしつつ上手に活用していくことを提案している。

ウ 【文章Ⅰ】ではネット環境では欲しいものだけが手に入り、「寄り道」は起こり得ないだろうと述べているが、【文章Ⅱ】ではネット環境でも「寄り道」はできると述べている。

エ インターネットを利用した調べ学習について、【文章Ⅰ】ではインターネットが世間に広まったスピードを否定しているが、【文章Ⅱ】ではこれからの時代に必要な方法だと高く評価している。

問九 次に示すのは、【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を読んだ生徒が話している場面である。生徒Dになったつもりで、（ ）にあてはまるあなたの経験を具体的に書きなさい。

生徒A 文章Ⅰではネット環境では「寄り道」なんてないと書いてあったけど、ぼくはネットで調べたついでについてゲームをしちゃうんだよね。

生徒B 調べものをしていてゲームで遊んじゃうのって、「寄り道」とはちがうんじゃないの？

生徒C そうね。たとえば私は、この前、課題図書を買おうと思って本屋に行ったんだけど、「ざんねんな生き物事典」という本を見たとき、「ざんねん」という言葉が面白くて買っちゃったの。生き物には興味ないと思っていたのに、読んでみたら、夢中になっちゃった。こういうことって、「寄り道」だと思うわ。

生徒A あっ、そういうことか。だったらぼくは、勉強ではないけど、サッカーのドリブルがうまくなりたくて動画を見ていたら、足の動きが気になって、人間の筋肉のしくみに興味を持つようになったんだよね。「寄り道」は世界が広がるね。

生徒B 「寄り道」って、勉強だけじゃなくてもいいのよ。

勉強でもスポーツでもほかの分野でも、自分が何かこんな「寄り道」をして、こんなふうに良かったと思える経験、あるかなあ。

生徒D うーん、そういえば、（

生徒B そうだね。それも「寄り道」だ。

二次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

登場人物

私……………小野寺まりあ（マリリン）

生まれてすぐに教会の前に捨てられていたが、小学校四年生の時に、海の事故で実の娘を亡くした安西夫妻に養女として迎えらる。しかし夫妻との関係がうまく結ばず、家出同然のように安西家を去る。その後結婚するが、黙って家を出て行った夫を捜すために、彼との思い出の島を訪れ、「つるかめ助産院」の「先生」と偶然出会う。「先生」から赤ちゃんが出来ていることを教えられ、そこを手伝いながら子供を産もうとしている。

先生……………長く勤めていた都会の産婦人科の病院を辞め、旅で訪れた島で「つるかめ助産院」を立ち上げた女性。

エミリー（あだ名）……………「つるかめ助産院」を手伝っているベテランの助産師。

サミーとバクチー嬢（どちらもあだ名）……………二人とも「つるかめ助産院」で働いている。バクチー嬢はベトナムから来ている。

「長老がー、長老がー」

先ほど帰ったはずの男性が、そこまで言っただけで玄関から地下足袋のまま入ってくると、

「海で溺れたって……………」

それだけ口にして、苦しそうに呼吸を整えている。

「今どこにいるの！」

先生ははじけるように母屋を飛び出し、呼びに来た男性と共にそのまま走って出ていった。

確かに、今日のランチパーティーを楽しみにしていたはずなのに、言われてみれば、長老の姿を見かけていない。けれど、台所の方が忙しくて、気にとめていなかった。昨日の夜のイザリ漁で一緒だったのに。あの長老が、海で溺れるなんて……………。事情がわからないだけに、どうすることもできない。

（中略）

ただならぬ空気を察したのか、最後まで残っていた数人の泥酔客も、みんないつの間にか引き上げていた。エミリーが、台所にいる火の神様に手を合わせたので、私とバクチー嬢も二人並んで同じようにする。バクチー嬢が、ベトナム語で何かお祈りのような言葉をささやいていた。

①「長老さんは島一番の海の人なんだから、大丈夫、大丈夫、大丈夫」

エミリーがそう言いながら、私達の肩を軽く叩く。本当はみんな不安で、押し潰されそうなのだ。（中略）一秒一秒が、まるで永遠のよう

に長く感じられた。

先生が戻ってきたのは夕方だった。私とパクチー嬢とサミーは、同時に立ち上がって玄関へと向かう。エミリーは家で待機すると言い、一度島民アパートに戻っている。

どうでしたか？ 長老、助かったんですよね？

先生が戻ったら真つ先にたずねようと思っていたのに、怖くて誰も聞くことができない。(中略)でも、まさか、長老に限って……。

「漁師仲間が見つけた時には、もう息をしてなかったんだって」

先生は肩を落としてそうつぶやくと、

「ちよつと疲れたから休んでくる」

背中を丸め、とぼとぼとツリーハウスの方へ向かう。数秒後、

「なんでだよっ！」

③ サミーが、いきなり叫んで壁を思いつき蹴飛ばした。それでも気持ちが収まらないのか、今度は柱を拳で殴る。

「昨日まで、ちゃんと生きてたくせに！」

私だって、それは全く同じ気持ちだった。イザリ漁に行ったのは、夢なんかじゃない。ちゃんと、現実なのだ。

私とパクチー嬢は、肩を抱き合い、お互いを支えるようにして泣いた。二人とも、滝のように涙がこぼれて、いつまでたっても止まらない。

(中略)

今すぐ長老に会いたい。そして、あの笑顔を見たい。

体中の血液が、すべて涙になって体の外に出ていってしまったようだった。その夜は泣きすぎて、少しも眠れなかった。隣の布団で横になっっているパクチー嬢も、一晩中寝返りを打っていた。パクチー嬢は助産院で働いている期間が長いから、私やサミーよりもっとたくさん
の思い出があるに違いない。

翌朝、先生が腫れぼったい顔であらわれ、事情を説明してくれた。

長老は、リーフの先端部分まで歩いていき、そこで足元のリーフが割れてしまい、海に落下してしまったらしい。ベテランの漁師でも、そんな危ない場所に一人では行かないそうだ。

「長老、自分の親父さんも海で亡くしているから、人一倍海の怖さを知っていたのよ。だからいつもはすごく慎重なのに。どうして、そんな危険を冒してまで行っちゃったかね」

先生は不思議そうな表情を浮かべていた。ふと、私の中にある予感が突き上げてきた。そうだと気づいたとたん、全身の血が引いていく。立っているのも苦しくなり、その場にぺたんと座り込んでしまった。涙がこぼれるのを止められない。

「ごめんなさい……」

私は、ようやく一言だけつぶやいた。

「マリリンが謝ることないじゃない」

事情を知らないパクチャー嬢が、泣きじゃくる私の背中をゆつくりとさすってくれる。けれど、慰めなぐさの言葉をかけられればかけられるほど、ますます罪悪感が押し寄せた。

(中略)

夕方、どうしようもない気持ちを抱かかえて診察室しんさつしつに行った。(中略)

「どうした？」

すっかり疲れ切った表情で、先生はメガネ越しに私を見る。何も言えず、ただその場に突っ立っていると、(中略)

「何かあったのなら、話してごらん」

泣き笑いの表情で、私をうながした。体中をロープでしばられているような重たい気持ちを自ら解放したくて、私は一昨日のことを先生に話した。

「私が悪いんです。長老がとったタコを食べたいなんて言ったから。だから長老は、無理してそんな危険なところまで行ってしまったのかもしれない。私のせいで……」

私が、間接的に長老を海に突き落とすたのだ。

先生は、一瞬いっしゆんくしゃつと表情を崩くずした。^④泣きそうになるのを必死にこらえ、再びにつこり笑おうとする。震える唇くちびるを無理に動かし、話し始めた。(中略)

「長老、まりあちゃんのこと、すつごく褒ほめてたんだよ。いい子だいい子だ、って。どんな小さなことにでも、ありがとうって言ってくれる、って。一人でもちゃんと子供を産もうとしていて、偉えらいって。もし自分がまりあちゃんの立場だったら、絶対に一人で産んで育てようなんて思えないって。勇気があって、強い子だって、よく言ってたの」

いつになく、穏おだやかな声で話してくれる。そのまま黙って先生の言葉に耳を傾かたむけた。あれだけ泣いたのに、長老のことを思い出すと、また涙が込み上げてしまう。

(中略)

「長年ちがうこういう仕事をしていると、ふと感じることがあってね。神様かみさまみたいなので⑤つかい目ん玉で見たら、生まれることも死ぬことも、そんなに変わらないんじゃないのかなーって。生まれる現場と亡くなる現場って、不思議なんだけど空気のトーンが一緒おっしょなのよ。厳おそろかっというか、神聖しんせいっていうか。とにかく人間の手にはどうしたって及およばない神様の領域りやういきって気がするよ。サバサバしているようだけど、死ぬ時は死ぬ

し、生まれる時は生まれる。

でもやっぱり私は、神様みたいにはなれないから、人の死も動物の死も、いちいち悲しんじゃうし、ずっと引きずってしまっただけだ」
(中略)

親しい人との別れがこんなにも辛いなら、もう誰とも親しくなどなりたくない。誰かを愛しく思えば思うほど、その悲しみは大きくなる。ああ、そういうことだったんだ。私は、今やっと気がついた。安西夫妻の、深い深い悲しみについて。それでも私を迎え入れようとしてくれた、優しさについて。抱きしめてほしかったのなら、どうして私はあの時、自分の両手を差し出さなかったのだろう。悲しみに暮れる二人をこの私が抱きしめていたら、もっと違った関係が築けたかもしれないのに。たった数カ月一緒にいた長老を失っただけで、こんなにも苦しいのだ。おなかを痛めて産み、日々育ててきた実の娘を亡くした安西夫妻の絶望は、どれほどだっただろうか。私は自分の淋しさばかりに目を向けて、安西夫妻の気持ちなど考えようともしていなかったのだ。

〈長老の死から数日たったある日のこと〉

その日、私宛に小包が届けられた。私がこの島に知っている人はほとんどいないし、今まで私宛での荷物が届いたことなど一度もない。何かの間違いじゃないかと思った。けれど、先生からその箱を受け取ると、確かに私の名前が書いてある。なんとそれは、安西夫妻からの届け物だった。

(中略)

人目につかない水中出産用の浴室にこもり、丁寧に包み紙を解いた。箱の蓋を開けると、出てきたのはファスナー付きのビニール袋に入った布だった。そうそう、里母は食品以外の物でも、何か保管する時はいつもこの袋を利用するのだ。一緒に、手紙も入っている。緊張しながらファスナーを開けると、ふわりと安西家の匂いがして、なぜだか胸が苦しくなった。中に入っていたのは、小さな小さな産着だった。

私は、パソコンからプリントアウトしたらしい、一枚の手紙を読み始めた。

「まりあさん、お元気ですか？

妊娠のこと、私どもにまでお知らせいただき、ありがとうございます。

主人と相談し、この産着を今回、あなたにお戻しすることに決めました。

これは、あなたが最初に保護された時、着せられていたものだそうです。

お母様の匂いが染みついていたのかしら？ 私も直接聞いたわけではありませんが、乳児院の方の話によると、あなたは、この産着に包まれていた時は、泣きやんだのだそうですよ。体が大きくなってからも、あなたはこれを手放そうとせず、眠りに入る時はいつもこの布の

一部を口に含み、眠っている間も、決して手から離そうとしなかったそうです。

(中略)

あなたが小学校四年生の時、ご存じの通り、あなたは私達の上に里子に来てくれました。伝わっていなかったことは残念に思うけれど、私達は本当にうれしかったのです。あなたがかわいくてかわいくて、本当に亡くなった娘が天国から舞い戻ってきたように感じていました。あなたには辛い過去があるというのに天真爛漫で、私達は二人とも、すっかりあなたに魅了されました。愛おしくて仕方なかったの。あなたが家にいてくれることがうれしくて、夜中に寝顔を見に部屋に忍び込んだのも、一回や二回ではありません。

でも一方で、娘に対して申し訳ない気持ちになったのも事実です。娘は苦しい思いをしてこの世を去ったというのに、その命を助けられなかった私達がこんなに幸せになって良いのかしら？ って。それで、いつも娘のことを忘れずにいようと思うあまり、あなたには辛い思いをさせていたのかもしれない。

あなたがそんな思いで過ごしていたなんて、先日お手紙を頂戴して初めて知りました。すべてが言い訳になってしまいかもしれませんが、どうか、私達のことを許してください。娘にしてあげられなかったことを、あなたにしようとするのが、あなたの気持ちを逆に傷つけてしまっていたのですね。二度と娘を失いたくないあまりに、あなたを海から遠ざけてしまったこと、私も主人も、心から申し訳なく思っております。

もしも私達の過ちを許してくださるなら、一度でいいから、私達にもあなたの赤ちゃんを見せてください。孫を抱っこさせてもらえたら、どんなに幸せか……。

まりあさん、どうか、お幸せに。(中略)

最後に、里父と里母の名前が記されていた。

産着には、動物達の絵が刺繍されている。生まれたての私は、かわいい産着に包まれていた。それを知っただけで、もう十分だった。私は、母親にとって単なるゴミではなかったのだから。わざわざゴミに、素敵な衣装を着せる人はいないだろう。私は、決して誰からも愛されずに今まで生きてきたわけではないのだ。安西夫妻も、私のことを疎ましく思っていたわけではないのだ。

赤ちゃんが生まれたら、この産着に包んであげようと思った。この産着を選んだのは、おなかの子のおばあちゃんに当たる人だ。きっとその人も、この産着を選ぶ時、幸せだったに違いない。どんな子が生まれてくるんだろうと想像しながら、どれが似合うか一生懸命に選んでくれたはずだから。

産着は優しく手洗いして、つるかめ助産院の洗濯物と一緒に日向に干しておいた。生まれた時、私はこんなにも小さかったのだ。そして今、大人になり、母親になろうとしている。

私は初めて、安西夫妻に心から感謝する気持ちになった。この子が生まれたら、きつとまた会いに行こう。たくさんたくさん抱っこしてもらって、おじいちゃん、おばあちゃんだと教えてあげよう。その時、どさくさにまぎれてでも、安西夫妻に抱きついてみよう。

(小川 糸『つるかめ助産院』より)

※ 問題作成の都合上、文章の一部を省略したところがあります。

問一 ――― I 「はじけるように」・II 「ただならぬ空気」のここでの意味として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

I はじけるように

II ただならぬ空気

A 心配している様子で

A どこことなく暗い雰囲気

I あわてている様子で

I いつもとは違った様子

ウ 勢いのある様子で

ウ 悪いことが起こりそうな気配

エ とびはねる様子で

エ 緊張感で張り詰めた状況

問二 ――― ① 「エミリーがそう言いながら、私達の肩を軽く叩く」とありますが、「エミリー」はなぜ「私達の肩を軽く叩く」いたのですか。

その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

A この場にいる人たちの中で一番年長である自分が、皆の肩を叩いて力づけたいと考えたから。

I 皆の肩を叩くことで自分自身にも「大丈夫」だと言い聞かせて、自分にしかかる不安をぬぐい去りたかったから。

ウ なんの確信もない「大丈夫」という言葉だけでは皆を納得させられないので、具体的な行動で補いたかったから。

エ 長年、海と共に生きてきた長老が海で亡くなるはずがないという強い信念のもとに皆の不安を取り除きたかったから。

問三 ――― ② 「怖くて誰も聞くことができない」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号

で答えなさい。

A 長老の死を誰よりも一番つらく思っている先生に、長老のことを思い出させてしまうのは、かろうじて保っている先生の心を傷つけてしまうと、皆が心配したから。

I 長老がどうなったのかが一番聞きたいことではあるが、疲れ切った様子の先生に、自分たちの関心だけを優先して聞くのは失礼だと皆がためらったから。

ウ 長老になにかあったのならば一体どうしたらいいのか、という不安が大きくなってしまい、考えていた質問が適当なのか、皆がわからなくなっているから。

エ 長老の安否を直接尋ねて、もしも先生から決定的な返事が返ってくれば、長老の死が動かしがたい事実になってしまうと皆がおそれたから。

問四

——③「サミーが、いきなり叫んで壁を思いつきり蹴飛ばした」とありますが、この時の「サミー」の様子を説明したものととして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 長老の死の知らせを聞いても、昨日まで元気だった長老が死んでしまった現実に納得できずに心が乱れている様子。

イ 長老の死の知らせを聞き、医師であるにもかかわらず長老を助けられなかった先生に対して怒りをあらわにしている様子。

ウ 長老の死の知らせを聞いても、まだどこかで長老が生きているかのように思えて、この状況が現実か夢かと混乱している様子。

エ 長老の死の知らせを聞き、長く海を愛してきた長老の命をあつさり奪ってしまった自然に対していきどおっている様子。

問五

——A・Bの「涙がこぼれ」た時の「私」の心情には違いがあります。A・Bの違いがわかるようにそれぞれの心情を説明しなさい。

問六

——④「泣きそうになるのを必死にこらえ、再びにつこり笑おうとする」とありますが、この時の「先生」の表情からは、どのようなことが読み取れますか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 若い女の子にいいところを見せようとした長老をなさげなく思うのだが、それもまた「長老らしいな」と、その死をなんとか受け入れようと思っている。

イ 長老の死の原因があまりにささいなことだったことに驚くが、間接的に自分が長老を殺したのだと思っている「私」を、これ以上責めるのはやめようと思っている。

ウ 長老の優しい人柄を改めて思い出し、長老を失った悲しみがこみあげるが、目の前にいる「私」の気持ちを思い、「自分を責める必要はないよ」となぐさめたいと思っている。

エ 長老と自分とのつきあってきた年月の長さを重く受け止めているが、「私」がこのまま自分を責め続ける人生の長さを思い、「早く忘れなさい」と勇気づけようと思っている。

問七 ——⑤「神様みたいなでーっかい目ん玉で見たら」とありますが、それはどのような見方ですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 人の生と死は一对のものであり、死んでいく人がいるからこそ新たに産まれる命もあるのだと考えること。

イ 人の生や死に直面するたびに感情に振り回されることなく、人間の誕生も死も全てが自然の営みであると心静かに受け止めること。

ウ 人の生死は人間の医療の力ではどうにもならないこともあるので、最後は神様に祈ることしかできないのだと悟ること。

問八 ——⑥「それを知っただけで、もう十分だった」とありますが、「私」は何を理解したのですか。三十字以上三十五字以内で説明しなさい。

問九 本文の内容と表現の特徴の説明として適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「体中の血液が、涙になって体の外に出ていってしまったようだ」や「体中をロープでしばられているような重たい気持ち」など前半部では直喩を多用し、長老の死に直面した「私」の心情が分かりやすく表現されている。

イ 「私」の心情は直接的に描写されている一方で、「パクチャー嬢も、一晩中寝返りを打っていた」や「先生は、一瞬くしゃっと表情を崩した」とあるように、その他の登場人物の心情は行動や表情によって間接的に描かれている。

ウ 長老の死を経験したことで、同じように大切な娘を失った「安西夫妻」の深い悲しみを理解できるようになった「私」が、「この子が生まれたら、きつとまた会いに行こう」と前向きに未来に向かって生きていく姿を暗示している。

エ 長老の無事を祈る皆に対してエミリーが言った「大丈夫、大丈夫」や「先生」が「私」をなぐさめていた時の「いい子だいい子だ」などのように、話し手が同じ言葉を繰り返すことで、自分自身に言い聞かせていることが読み取れる。

オ 養父母からの手紙にある「孫を抱っこさせてもらえたら、どんなに幸せか…」という表現からは「安西夫妻」が「私」のことを実の娘のように心から大切に思っている愛情が印象付けられている。

三 次の①～⑧の——部のカタカナを漢字になおし、⑨～⑫の——部の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

- ① いままで食^くべ^ずにケイエン^{けいえん}して^{いた}トマト^{とまと}を食^たべた。
- ② ヒヤツカ^{ひゃつか}店^{てん}に行^いく。
- ③ 不動産^{ぶどうさん}のバイバイ^{ばいばい}には、注^{ちゅう}意^いが必^{ひつ}要^{よう}だ。
- ④ ソシキ^{そしき}的^{てき}な犯^{はん}行^{ぎょう}とし^て警^{けい}察^{さつ}は動^{どう}い^てい^るよ^うだ。
- ⑤ 鳥^{とり}にはス^すに帰^{かえ}る本^{ほん}能^{のう}が^ある。
- ⑥ お正^{せい}月^{げつ}にはキセイ^{きせい}する人^{ひと}が^お多^{おほ}い。
- ⑦ 退^{たい}職^{しやく}した父^{ちち}は、シンキ^{しんき}一^{いつ}転^{てん}新^{しん}しい習^{しゆ}い事^じを始^{はじ}めた。
- ⑧ ヤサ^{やさ}しい問^{もん}題^{だい}か^ら解^とく。
- ⑨ 今^{いま}回^{かい}の台^{たい}風^{ふう}は前^{ぜん}回^{かい}の^{もの}と類^{るい}似^し点^{てん}が^お多^{おほ}い。
- ⑩ 大^{おお}きな川^{がわ}の河^か口^{こう}の近^{ちか}く^に家^{いえ}が^ある。
- ⑪ 桃^{もも}の節^{ふし}句^{くみ}のおい^{おい}わ^いを^する。
- ⑫ 中^{ちゅう}学^{がく}生^{せい}な^ら、も^う分^{ぶん}別^{べつ}が^つく^はず^だ。

